

「十二人の怒れる男（4人）」リバティ用

原作…レジナルド・ローズ 上演台本…永妻晃

1 「評決の出し方はみなさんにお任せします。先に議論して投票するか、それとも投票が先でもいいです」

3 「まず、投票しましょう」

2 「それが手っ取り早い」

1 「これは第一級殺人で有罪の評決を出せば被告は死刑です。有罪、無罪どちらの評決でも全員一致が条件です」

2 「分かってる。全員一致だ」

1 「では、有罪の人は……」

4 以外、挙手。

1 「(ぎゅっと見て) 有罪が十一人(不思議?) ……」

1、手を挙げていない4を怪訝そうに見つめる。

一同の視線が4に向く。

2、4に近づき、

2 「おい、聞こえてたのか？」

4 「ええ」

1 「(4を促すように) 有罪の人は？」

4、手を上げない。

一同に、「おーッ？」「うーん？」と、動揺の声。

2、4を睨むようにして、

「無罪は？」

4、ゆっくり手を挙げる。

1 「無罪、一人」

2 「どこにもへそ曲がりがあるわ」

1 「本当に無罪だと思うんですか？」

4 「さあ」

1 『『さあ』?!』

3 『『さあ』?!』

2 『『さあ』とはどういう意味だ!』

4 「解らないということです」

- 3 「法廷で聞いたでしょ。あの子は人を殺した」
- 1 「父親の胸を10センチも刺したんです」
- 2 「証拠は山ほどある」
- 3 「どうしたいんですか？」
- 4 「話し合いましょう」
- 2 「何を話す、十一人が有罪だって言ってるんだ」
- 3 「あの子の話を信じるの？ あなた、あなたね、この六日間、何を
見て、何を聞いてたの？」
- 4 「私はこの裁判を、法廷に始めて入った時から」
- 4、腕時計を見て、
- 「十二分前に法廷を退廷たいていするまで確しつりと観み、聴き、メモも取りま
した」
- 2 「じゃ、どこから無罪って言葉が出るんだ！」
- 4 「私が有罪に投票するとあの子は死刑です。人の生死を五分で決め
て、評決が間違っていたらどうするんです？」
- 2 「時間は関係ない。直ぐ決めて何が悪い？」

3 「何を話し合うの？」

1 「時間の無駄ですよ」

4 「一時間話し合いましょう。一時間……」

4、柱時計を差して、

「現在、5時15分ですから、6時15まで、でないとは私は無罪を押し通します」

3 「なんて人？ 私は彼の証言から有罪を確信しています。つまりあ

の子の言葉の中に無罪の証明が一切ない」

4 「有罪こそ証明が必要でしょう」

3 「あら？」

1 「みなさんご意見は？」

2 「よし分った、話し合おう！」

1 「それで？」

4 「被告の少年は悲惨な人生を送って来ています。スラム街に生まれ、九歳で母と死別。父親は文書偽造で服役。その間彼は福祉施設に預けられていた。つまり彼は不幸な幼年期を過ごしています」

2 「それがどうした？ 不幸な幼年期が奴を人殺しにしたって言いたいのか？ じゃ、俺も人殺しになる可能性があるって訳だ？ 俺の幼年期は地獄だったよ、でもな、人は殺さないぜ」

4 「私が言いたいのは、あんな乱暴な人間になったのは毎日父親に殴られたからだ、だから少しは彼の事を考えてやっても」

3 「ちよつと待つてよ。人殺しに何を考えてやれって言うの？ 俺たちはあの子に借りはないぜ、ちゃんと裁判も受けてる。それにあの子は大嘘つきだ！」

1 「あなたさ、何故彼が無実なのか言つて貰えますか？」

2 「目撃者がいる」

3 「そうよ、これは個人的な感情じゃない、事実なんだ。まずその一つ、下の階に住んでいる老人が夜中の十二時十分に争うような音を聞いている。そして奴（あの子）が『殺してやる』と叫んだ直後に人が倒れる音がした。警察が駆けつけると父親が死んでいた。死亡時刻は同時刻頃。これが事実。まだ十八歳なのは同情するけど罪は償わないと」

2 「少年の話は信用できない。『映画を観ていた』と言ってるけど、題名も俳優の名前も覚えてないし、映画館で目撃もされてない……こんな事つてあるか？」

1 「向かいのビルの女性の証言が何よりの証拠だと思いますよ。彼女は少年が人を殺すところを見ている。いいですか、女性はこの猛暑で寝るに寝られず窓の外を見ていて、被告の少年が父親を刺すのを見たんです。時計は十二時十分を指していた。それに少年とは顔見知りです」

4 「しかし彼女の部屋は高架鉄道を挟んだ向かいのビルですよ。その時電車も通過していません」

3 「その車両には『乗客は一人も乗っていません』。彼女の部屋から電車の向こうは見えると証明されています」

1 「私は動機を考えてみました。人は動機もなく人を殺しません。少年の隣人たちの証言では、少年と父親は喧嘩していた。大声で。怒鳴り合い。罵り合っていたと。夜の八時頃です」

4 「そうです。二人は口論して父親が少年を二回殴った。そして少年

は怒って出て行った……」

3 「それが事件の発端ですよ」

4 「しかし、それが父親を殺す動機につながったとは思えません。少年は小さい頃から何度も殴られていて暴力は生活の一部です。たった二回殴られたぐらいで殺しますか？」

3 「限度だったかもしれませんよ。限度……分かりますね」

2 「奴が犯人に決まってるだろ。前科を見なよ。教師に石を投げて少年審判しんぱんかけられ、十五で施設送りだ。ひったくりとナイフの乱闘で逮捕。（4を諭すさと様に）ナイフは名人だそうだ。父親と喧嘩をしている時も、『殺してやる！』と何度も叫んだのを隣の人は聞いているんだ」

4 「本気で言ったんでしょかね」

2 「どういう事だ?!」

4 「ですから、本気で父親に『殺してやる』と言ったんでしょか？」

2 「ああ、奴は言ったんだよ、本気でな、だから殺した！」

3 「『家庭環境』のせいで事件を犯したとしても犯罪は犯罪です」

1 「スラム街は犯罪の巣です。そんな子供は社会の脅威になる可能性がある」

2 「スラム街の奴らはクズだよ、クズ、クズ。社会に必要なはない！」

4 「私もスラムの出身です」

2 「なるほどな?!」

4 「ゴミためて遊んだから今もくさい臭いがするかも知れませんが、だからといって彼の見方をする訳でもありません。私はただ正しい評決を出したいだけです」

一同、黙る。

4 「聞いて下さい。私もこの事件は皆さんと同じく彼が有罪に思えます。法廷の六日間の証言を皆さんと一緒に聞いて来ました。しかし、その証言の中に確かな証拠はないと思います。弁護人も充分に反対尋問をしていません。すべてに見逃しが多過ぎます」

3 「質問なんかしたら、余計不利になるからじゃないんですか？」

4 「少年の立場で考えましたが、私なら弁護人を替えます。命がかかっているんだから。検察側の証人を叩きのめして欲しい！ 犯行を

見た証人は女性一人だけで、もう一人の老人は声を聞いたとか、人が倒れる音がしたとか、状況証拠だけです。検察側の証人はその二人だけ……もし、間違っていたら？」

2 「間違える？」

4 「人間は間違えを犯すものだ」

2 「間違ってるない」

4 「絶対に？」

2 「絶対なんてあるわけないだろうが！」

4 「(にっこり) そのとおりです」

2 「(呟くように) ちくしょう……。 (4を睨み) 肝心な話をしよう。

いいか、父親の胸に刺さっていたナイフは少年が犯行の夜に買ったと認めている」

4 「ナイフの証拠写真はここにありますか？」

1 「用意させます」

1、ドアの所に行って、係員に何か言っている。

3 「ナイフは重要な証拠です」

4 「そのとおりです」

3 「(手を挙げて) いいですか」

4 「どうぞ」

3 「では、順に考えましょうよ。父親に何度か殴られて……」

4 「二回」

3 「二回殴られて、午後八時に少年は家を出た。そのまま中古店へ行きナイフを買った。それは普通のナイフじゃない。柄えに珍しい模様があるナイフです。店の主人も『あんなナイフは初めてだ』と言っています。午後八時四十五分少年は友人と会った……(4に) ここまで合ってます？」

4 「ええ」

3 「ナイフを買った後、その友人と一時間ほど喋って……」

2 「友人もそのナイフを見ている」

3 「少年は十一時半に映画を観て午前三時十分に帰宅し逮捕された。ナイフは映画へ行く途中で落としたと言っている」

2 「嘘だな」

3 「そう、映画館へも行かなかったと思いますね。出演俳優も、題名も覚えていないんだから」

1、ナイフ証拠写真を係員から受け取ると戻って来る。

3 「本当はナイフを買った後、家に戻って、父親を刺し殺し、午前十二時十分に家を出た。本当にあの子がナイフを落としたと（4に）あんたは信じてるの？」

2 「たまたまそのナイフを拾った人間が少年の家で父親を刺したとでも言うのか？」

4 「誰かが似たナイフで刺したとか……」

2 「まさか？」

1、一同に血の付いたナイフの証拠写真を見せる。

1 「見て下さい……本当に珍しいナイフです」

2 「そんな偶然がある訳ないだろう！」

4 「可能性はあります」

2 「奇跡でも起きない限りない！」

4 「そうですかね」

3 「同じナイフがあるっていうの？」

4 「ええ」

一同、驚く。

2 「あるなら、見せてみる！」

4、鞆を一同の前に投げるように置き、鞆の中をあさる。

一同、5を取り囲む。

4、鞆の中から、布に包まった物を取り出すと、

一同に翳^{なび}し、丁寧にまかれた布をくるくると剥ぎ、

「はい、これです」

と、同じ絵柄のナイフを一同に見せる。

一同、騒然。

4 「どうです」

1、証拠写真とナイフを見比べる。

1 「同じだ？」

3 「あるじゃない。これ、どこで?!」

4 「昨夜、少年の家の近くの質屋で買ったんです。二十ドルでした」

1 「同じ様なナイフで誰かが父親を刺した？」

2 「無い、無い、無い、そんなことは！」

4 「さあ、どうでしょう。現にこうやって同じナイフが眼の前にある
じゃないですか。私が作ったとでも言うんですか？ 私にはそんな
技術はない」

3 「そうね。確率は低いけど、可能性はある」

2 「こうなったら評決不能にしようぜ、疲れた。必ず再審で有罪にな
るさ」

2、柱時計を指し、

「おい、あんたの言った約束の時間だ。評決不能……決まり。さあ、
お開きだ！」

1 「ちよつと、待って下さい。ナイフの件は？」

2 「一晩中ここに居る気かよ？」

3 「人の命がかかっているんですよ」

2 「あんた、こいつの味方か？」

3 「そうじゃないけど、ナイフが？」

2 「ナイフなんかどうでもいいだろ。実際に犯人を見た女性の証人がいるんだ！」

3 「そうだった」

4 「……提案があります」

1 「何ですか？」

4 「もう一度投票しませんか？ 私をのぞいて、もちろん無記名で、もし有罪が11なら皆さんに従います」

1 「よし、そうしましょう。反対の人はいませんね」

2 のみ手を上げる。一同の挙手が無いのを見て、

「何でもやってくれ！」

1 「用紙を配ります……」

1、ポケットからメモ帳を出し、切りながら（無対象）、

「ペンはお持ちですか？」

3 「いいえ」

1、ポケットから数本のボールペンを出し、
3に渡し、2に、

1 「勘ですか？ 動機もなしに？」

2 「ああ、昔から俺は勘がいいんだ。奴を電気椅子に送ろうとしてたのに……」

1 「そうですか、たいした勘ですね。皆さん……（手を挙げて）私です。私が無罪に一票入れました。理由を聞きたくありませんか？ 彼（女）は一人で闘った、有罪に確信が持てないからって……なかなか出来ることじゃない。私には出来ない。その勇気を尊重して、私は無罪に入れたんです。有罪かもしれない……。しかし、もつと話し合うべきでしょ。10対2……」

2 「よし、分った……（1に）階下の老人の証言では、少年の『殺してやる！』と言う叫び声を聞いた後、人が倒れる音がした。不審に思っただアを開けると階段を逃げて行く奴の姿が見えた。これはどうなんだ？」

4 「本当に老人が見たのは少年だったのでしょうか？」

2 「少年が『殺してやる！』と叫んだんだ！」

4 「天井越しに声が聞こえますか？」

- 3 「暑い夜だったから、窓が開いてたとしたら？」
- 4 「しかし、その叫び声が少年の声だったかどうか聞き分けるのは難しいんじゃないんですか？」
- 3 「何故?! 向かいの女性の証言があるでしょう。車両の窓越しに少年が父親を刺すのを見た。それで十分でしょ」
- 4 「いいえ」
- 1 「何か確信があるなら言って下さい。確かに女性は殺人を見たと言っています」
- 4 「高架鉄道がある一点を通り過ぎる時間は？ ああ、一点と言うのは殺人が起きた部屋です」
- 1 「何か関係があるんですか？」
- 4 「何秒だと思います、電車が通過する時間です？」
- 1 「さあ？」
- 4 「(3に) 分ります？」
- 3 「7、8秒ぐらいじゃないの？」
- 4 「そう、約8秒弱かかります」

2 「何のゲームだ？」

4 「いいですか、6両の電車が、ある一点を、殺人現場の部屋を通過するのに約8秒弱……線路際に住んだ経験のある方はいます？」

3 「以前、高架鉄道を見下ろす部屋に住んでいたけど」

4 「電車が通過する時に他の音は聞こえましたか？」

3 「何も聞こえないよ。電車の音がうるさくてさ」

4 「二つの証言を結び付けます。第一、階下に住んでいる老人が『殺してやる』という声を聞いた直後、人が倒れる音を聞いている」

1 「ええ」

4 「第二に、向かいの女性は窓の外を見ていて、最後の2両越しに殺人を目撃した」

3 「それがどうしたって言うの？」

4 「最後の二両越しに殺人を見たなら、倒れた時、電車はちょうど轟音を上げて通過中だった。被害者が倒れる前の約8秒間。もう一度確認しますよ、いいですか、老人は少年の『殺してやる、と言う叫び声の直後に人の倒れる音を聞いた』と証言しています……本当に

叫び声と倒れる音が聞こえていたでしょうか、電車の通過中では不可能だと思いますが、しかも老人の聴覚で……」

2 「大声で叫んだんだよ！」

3 「無理ですよ。テレビのボリュームいっぱいに上げたって聞こえないんだから」

2 「爺さんは確かに聞いたんだよ、だからドアまで走って行って少年を見たんだ」

3 「待って“爺さんが走った”？」

1 「どうしたんですか？」

3 「もし、もしも……ですよ、あの爺さん、いえ老人が嘘をついていたとしたら……」

1 「嘘?!」

2 「何だ急に?!」

3 「老人の足取りを覚えていますか？ 老人はゆ・つ・く・り・と証言台へあがった。そう、左足が不自由なのを人前で隠そうとしてね」

1 「足が何だって」

3 「足をね、少し引き摺っていたんだよ。気が付かなかったですか？
そう、こんな風に（と、足を引き摺る）」

1 「（思い浮かべ）確かに」

3 「老人は身体が不自由な事を恥ずかしいと思っていたんじゃないで
しょうか？」

4 「そういう事ですか（一瞬考えて）やりましょう」

1 「何をですか？」

4 「脳卒中で足の不自由な老人が15秒でベッドから玄関まで行けるか
実際に試してみましよう」

2 「20秒だよ」

1 「いや、15秒と自慢げに言っていました！」

2 「もうろくしている爺さんだ、信用できるか！」

一同、2を見る。

2、バツの悪い顔。

4、ポケットから手帖を出し、

「ベッドから寝室のドアまで3.6メートル、廊下から階段のドアまで

13メートル、合計16.6メートル。これを15秒で歩けるか？」

2 「歩けるだろ」

4 「老人にしては長い距離です。ここがベッドの位置。（1が立つ）
（歩いて）ここが寢室のドア。（4が立つ）廊下を測ります」

2 「何をやるつもりだ？」

4 「時間を計ります」

2 「重要なら弁護士が質問してるだろう」

3 「見落としたんですよ」

2 「国選弁護士は馬鹿だって言うのか？」

4 「老人いじめになると思ったかもしれませんが。陪審員に悪い印象
を与えますからね。玄関の位置はここ、（3が立つ）チェーンがかか
っていた。秒針付きの時計を持っている方は？」

1 「私が……」

4、ベッドの位置に着き、

4 「ではいつでもいいですから、合図をして下さい」

1、時計を見つめている。

2 「何を待ってんだよ」

1 「秒針が上に来るまで……」

2 「(呆れる)」

1 「どうぞ！」

4 「ベッドから起き上がる」

4、ベッドから老人が起き上がる動作をして、足を引き摺り歩き出す。

1 「5秒経過」

2 「もっと早く歩いてたぞ」

4、少しスピードをあげる。

1 「10秒経過」

1は15秒を過ぎてしまったので、そこで立ち止まる。

4、ドアの位置まで来て止まり、

「ドアチェーンを外す、ドアを開ける、ストップ。時間は？」

1 「41秒です」

2 「……?!」

3 「あの老人が嘘をついた?! いや、待って下さいよ……事件を知つて、少年の声を聞き、人が倒れる音がしたと、思・い・込・ん・だ。(1に) 倍ばいしんちやう審長、無罪に変える」

2 「なにー?!」

1 「9対3になりました」

2 「いい加減にしろよ。探偵小説でも書くのか? 弁護士も投げ出したんだぜ」

1 「弁護士が頼りなかったんですよ」

3 「確かに法廷の証言では少年は有罪に思えたけど、よくよく考えりゃ、なぜ逮捕されるのに家に帰って来たのかもおかしい」

2 「刺したナイフを取りに帰ったんだよ」

1 「なぜ、現場にナイフを残したんです?」

2 「父親を殺してパニック状態で逃げ出したんだよ」

1 「そんなに慌ててましたか、指紋を拭き取る冷静さはあったんです
よ」

4 「そこが不思議なんです。もし、少年が犯人なら、何故ナイフを死

体に残し、指紋を拭き取ったんでしょうか？」

3 「そうですね。ナイフを買った事は、店の主人も彼の友人も知っていますからね」

1 「少年の父親に恨みを持った誰かが……」

3 「まあ、スラムの人間なら何らかの恨みを持たれてもおかしくないでしょうけど」

1 「ほら、『文書偽造で服役していた』ってありましたよね。その被害者の誰かが、偶然同じようなナイフで少年の父親を殺し指紋を拭き取った。どうです？ これなら理屈に合う」

3 「恨みではなく強盗だとしたら？」

2 「金があるような家じゃないぜ」

3 「お金以外の値打ちねうちがあるもの？」

2 「そんなものがあつたらとつくに金に換えてるだろう」

1 「ナイフ以外指紋を拭き取った形跡は部屋の何処にもなかったそうです。強盗じゃないです」

3 「手袋をしていたとか？」

- 1 「そこなんです。はじめから父親を殺す気なら確かに手袋を用意していた筈です。ところがナイフの指紋を拭き取っている。つまり、計画的ではなく衝動的に……だったという事です」
- 2 「計画的ではなく衝動的だったとしても、犯人ならナイフの指紋を拭き取るなんてしないさ、持ち帰れば済む事だ。あんたらはどうしても少年を犯人にしたくないようだな」
- 4 「父親は心臓を刺されています。ナイフを抜くと返り血を浴びます」
- 3 「そうだよ」
- 4 「犯人はその事を知っていた。血だらけの服装で街を歩けません」
- 2 「それは、少年にも言える事だ！」
- 4 「ナイフの名人の少年が犯人なら、ナイフを抜きとっていました」
- 2 「どういうことだ？」
- 4 「ナイフを抜く時、布を傷口に当てれば返り血は浴びません」
- 2 「ほう、さすがスラム出身だな。だがな、ガキは実の父親を刺したんだぞ、パニック状態だったんだ。奴は無意識にナイフの指紋を拭き取って逃げ出したんだ！」

4 「確かに、少年はパニック状態だったかもしれませんが。向かいの女性の証言では、殺害の直後に彼女は悲鳴を上げている。その声を少年が聞いていて、殺人現場を見られたと思った。いや、聞こえなかったのか知れない。少年は咄嗟とっさにナイフの指紋を拭き取ってその場を立ち去った。そして三時間後に気持ちが悪くなり、ナイフを取りに戻った」

2 「その通り！」

4 「(しっかりと)でもそうじゃなかったら」

2 「馬鹿を言え！ 随分ホラ話は聞いた事はあるが、こんな茶番劇はじめてだ。みんな正義に燃えてこの部屋に入ったのに……どうしたんだ！ あのガキは死刑にすべきなんだよ。電気椅子送りだ！」

3 「ちよつと待って、あなたは死刑執行人か？」

2 「ああ、スイッチは俺が入れてやるよ！」

1 「少年を殺したいだけなんでしょう」

4 「サディストだ！」

1、4に

「いっ！」

と、4に襲い掛かろうとする。

1、3が止めに入る。

2 「放せ……この野郎、殺すぞ!!」

一同、2を見る。

4 「……（微苦笑）まさか、本気じゃないでしょ？」

2、4を睨みつける。

1 「みなさん！ みなさんは争あそうためにここへ来た訳ではない筈です。郵便の告知でここに来た。決めるために……そうですね。その評決で私たちに損そんも得とくもありません。これが私たちの強みです……私情を交えてはいけないと思います」

3 「……どうです、また投票しませんか？」

1 「そうしましょう、用紙を……」

3 「口頭で投票しましょうよ、その方が立場がはっきりする」

1 「いいでしょう、反対の方は……」

一同、異存がないようである。

- 1 「(頷き)では私から……無罪……(居るであろう人に)あなたは？
有罪……あなたは？……無罪……(2に)あなたは？」
- 2 「有罪！」
- 1 「(居るであろう人に)あなたは？(次、3に)あなたは？」
- 3 「もちろん無罪」
- 1 「分かりました、6対6です」
- 2 「評決不能ひょうけつふのうにしようぜ、時間の無駄だ」
- 1 「(4に)ひとつ疑問なのは、犯行時間に観ていたはずの映画を少年は思い出せなかったことです」
- 4 「彼の立場として、思い出せますかね。父親と大喧嘩をして殴られた後ですよ？」
- 1 「いくら興奮状態だったとしても？」
- 4 「警察の尋問じんもんは父親の死体のある寝室でおこなわれたんです。そんな状況で……」
- 3 「しかし、法廷では映画の内容を言っていましたよ」
- 2 「弁護士の入れ知恵だよ、俺は犯行直後の尋問を信じるね」

4 「……」

一同、黙る。

1 「ちよつと、ナイフを……」

1、ナイフを手に取り、

1 「もう一つ、気になったんですが……刺し傷は下に向かって付いていたんですね……少年は167・5センチ、父親は185センチ、その差は17.5センチ。それだけ身長差のある人を上から刺せますか？」

2 「ふん！ 何も知らねえ奴だな。映画でもテレビでもしよつちゆうやってるよ。再現してやるからナイフを貸せ」

2、ナイフを受け取ると、

「誰か……」

4、が眼に入る。

2、4に近づき、

2 「いいか、ナイフはこう握るんだ。(逆手に握り)父親と奴の差は？」
1 「17.5センチ」

2、4の身長に合わせて低くなる。

2 「これくらいか、よく見てろよ」

2、4を睨み、思いつめたような態度で、

2 「クソーツ！」

と、ナイフを一気に振り上げる。

一同、騒然。

2 「安心しろ……刺したりはしねえよ。こうだ！」

2、4の胸にナイフを突き刺す仕種をする。

2 「背の差なんて関係ねえ、下向きになってるだろ、奴と同じだ。納得したか」

4 「……納得しませんね」

2 「何ッ？」

4 「みなさんナイフの喧嘩を見たことありますか？」

1 「いいえ」

4 「わたしは何度も見ています。スラム出身ですからね。街では名物でしたよ。(2に) ナイフを貸して貰えますか？」

2、渋々ナイフを4に渡す。

4 「ナイフはこうは構えない」

4、2がやった逆手から包丁を握るように持ち替え一同に見せる。

4 「こう握ったものを、こうすると、(逆手にする)時間がかかり過ぎます……(持ち替え) こう持ったら、このまま……スウツ！」

4、ナイフの突きあげる。

4 「こうやるんです。少年はナイフの名人……でしたよね」

2 「……よし、分かったもうウンザリだ。俺も無罪！」

1 「ちよつと待って下さい。答えになつてませんよ。あんたは一体どんな人なんです？ あなたは一貫して有罪を主張して来た。ところが今度は“ウンザリ”だから無罪に変える？ 人の命をもてあそぶ権利はあなたにはない！ 無罪と言うのなら、無罪だと本当に納得してから票の行方を変えて下さい。有罪だと思ふならそのままに、有罪か無罪かどつちらなんですか？」

2、1を暫く睨み、

「有罪だよ」

1 「何故?!」

2 「何故も糞もねえ、奴は有罪なんだよ」

4 「……投票しませんか？」

1 「……分かりました」

1、一同を見渡し、

1 「無罪の人は手を挙げて……1、2、3、4、5、6、7、8」

1、も手を挙げて、

1 「9……有罪の人は……（いるであろう人に）1、2」

2、手をあげない。

一同の視線が2に集まる。

1、改めて2に……、

「……有罪の人は？」

2、手を挙げる。

4 「……偏見^{へんけん}抜きで物事を考える事は難しいです。偏見で真実がぼやけてしまう。真実は永遠に分からないかもしれませんが。しかし、九人が被告を無罪と思っている。でも、間違っているかもしれない。

犯罪者を釈放しようとしているのかもしれない。三人の方にお聞きしたい。なぜ有罪だと確信を持てるんですか？（2に）あなたからお聞きしたい。何故、確信を……」

2 「いいか、女が見てるんだよ。それが証拠だ！」

1、4に怒りの眼を向けるが、顔を反らし、メガネを外すと目の付け根辺りをさすり出す。

3 「……ちよつと……そうだ?!」

4 「どうしました？」

3 「（2に）ちよつとあなたにお聞きしたいんですが」

2 「何だ？」

3 「……何故そんな風に鼻をこするんですか？」

2 「気になるからだ」

3 「メガネのせいですか？」

2 「そうだよ、もういいか」

3 「みなさん、思い出してください。目撃者の女性ですが……あの方も法廷で何度も鼻をこすってましたね」

- 4 「確かに、何度もね……それが？」
- 3 「彼女は60幾つとか言っていましたね」
- 1 「5です、65歳」
- 3 「公おみやげの場に出るので若作りをしていた。そう思いませんか？ 厚化粧で髪も染め、服装も若い女性が着るような物だった。メガネを掛けるのが恥ずかしかったんでしようね……そうですよ」
- 1 「だとすると、彼女には我々の顔もハッキリと見えていなかった」
- 3 「ことになりました」
- 2 「鼻をこすっていたからってメガネとは限らんだろうが」
- 1 「いや、あれはメガネの跡ですよ」
- 3 「メガネ以外にそんな跡が付きます？」
- 2 「分かったメガネの跡だとしよう。いいか、若く見せたくて、外出がいしゅつの時は掛けなかったとしよう。しかし殺しを見たときは一人で家に居たんだ。若ぶる必要なんかないだろう」
- 4 「確かに一人である時は、若ぶらなくていい。しかし寝ようとして

いる時ですよ？」

1 「メガネを掛けて寝る人はいないでしょう」

4 「もちろん外していた」

2 「何故分かる」

4 「推測すいそくです……彼女は『何気なく外を見た』と言ってます。メガネは外していたでしょう。外を見たとたん殺人が起きた。メガネを掛ける余裕はありませんよね。彼女が見たという少年はぼやけて見えてた筈です」

2 「何故そんなことが分かるだよ。彼女は遠視だったとしたら、サングラスの跡かもしれないだろ」

1 「たとえ、遠視だとしても、18メートルも離れている人間を夜間に確認できるなんて、そんな人ひとがいますか？」

4 「(居るであろう人物に)どうです、これでも少年は有罪ですか？ ……分かりました。(別の、居るであろう人物に)あなたは？ (頷く)」

1 「……これで無罪は十一です」

4 「(2に) 有罪は、あなた一人だ」

2

「構わねえよ、これは俺の権利だ！ 法廷での証言の何もかもが証拠だ！ 奴は有罪に間違いない。下に住んでいる爺さんがみんな聞いたんだ。爺さんはドアまで走って行って犯人を見たんだ。秒数なんて関係ねえ。同じナイフがあつたからどうした。お前たちの話はみんな大嘘だ！ 何もかもだ！ 事実をねじ曲げやがって！ メガネを外した女も宣誓せんせいしたんだぞ！ あの不良は死ぬべきなんだ……いいか、子供なんか信用するなよ。子供なんか……畜生！」

2 は力なくうな垂れる。

一同、憐れむように彼を見つめる。

4、2 に近づこうとする。

2、4 を手を挙げて制する。

2、虚脱したような声で、

「無罪……無罪だよ……あの子は無罪だ」

深い F・O

完

2018/11/9/f・i

照明がゆっくり一人の男（女）に注がれる。

4が立っている。

4

あの裁判で少年は無罪を勝ち取りました……それから、数年後、私はニューヨークの街角で彼と再会した。そして、彼の口からこんな事を聞かされました……『父親を殺し、わざと指紋を拭き取ったナイフを残したのは私です』、と……」

C・O

2019/3/08.fti